

日本キリスト教教育センター

2025年度 第3回 定例研究会

「イエスと福音書」

高砂 民宣（青山学院大学）



1

福音書とは

- 新約聖書は「マタイによる福音書」に始まり「ヨハネの黙示録」に終わる、全部で27の文書から構成されている。
- 新約聖書の冒頭には「福音書」が収められている。「福音」とは喜ばしい音信・使信（メッセージ）を意味する語である。イエス・キリストの生涯を記した文書が「喜ばしい音信」であるということは、イエスが全人類にとっての救いであるという信仰の表明に他ならない。



2

4つの福音書

福音書にはマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネと4つの文書があり、共にイエスの生涯を記しているが、それぞれ豊かな特徴を持っている。特に1950年頃から盛んになった編集史的研究により、4つの福音書は、それぞれの教会的立場に立脚する編集者によって、各々の神学の下に伝承が編纂されて出来上がったと考えられるようになった。

それは一つの出来事について報道することを例にとっても理解できる。ある事件について各新聞が報道しても、そこには若干の違いというものが見られる。それは、報道する記者の解釈や新聞社の立場というものが根底には必ずあり、そうしたものが微妙な相違を生むのである。そのように、各福音書間においても微妙なニュアンスの違いがあり、こうした若干の相違が、聖書の奥行きの深さを表しているのである。



1961年にスイスで発行された
「四福音書記者」の切手

3

四福音書記者を表すシンボル

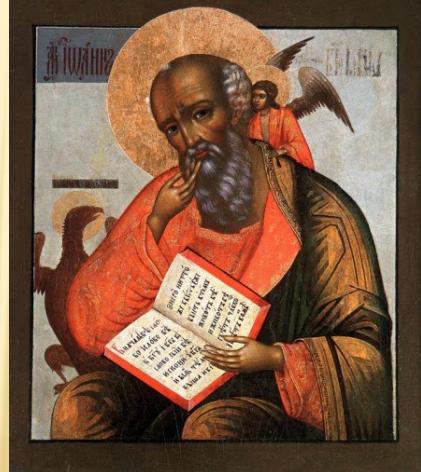


- マタイ= 天使 or 有翼の人間
(冒頭の系図に見られるように、イエスの人性について教えているから?)
- マルコ= 有翼の獅子 (キリストの王たる威厳を伝えているから?)
- ルカ= 有翼の雄牛 (キリストの生涯の犠牲的な面を強調しているから?)
- ヨハネ= 鷲 (福音書記者の眼が、天の神祕を深く見通したから?)
- 上記の4つの福音書の標章に関しては、旧約聖書のエゼキエル書1：10、新約聖書のヨハネの黙示録4：6～7に基づくと言われる。

4

「共観福音書」と「第四福音書」

マタイ、マルコ、ルカの3つの福音書は相互に関連が深いために「共観福音書」と呼ばれる。それに対し、「ヨハネによる福音書」は他の福音書記者たちが知らない（或いは無視した？）伝承を利用しているため、性格が異なっている。別名を「第四福音書」ともいう。



5

ヨハネ福音書と共観福音書の相違



- ヨハネ福音書は特に、「イエスとは何者か」というキリスト論に最初から集中している。

- 「5,000人の供食」と呼ばれる奇跡は4つの福音書全てに記されているが、ヨハネだけは奇跡の後に長い講話が続き、イエスは「わたしが命のパンである」と断言する（6：35）。

6

「共観福音書」とは何か



19世紀以来、多くの学者たちの研究によって、「マルコによる福音書」が最初に成立したと考えられるようになった。成立年代は60年代、或いは70年代前半と見なされている。続いて「マタイによる福音書」と「ルカによる福音書」が80年代に成立し、「ヨハネによる福音書」は90年代に成立したと考えられている。

7

「共観福音書」とは何か

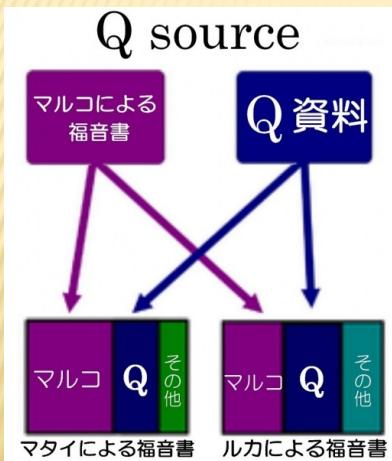


「マタイによる福音書」と「ルカによる福音書」は、「マルコによる福音書」を基礎として編纂されたと考えられている。事実、「マルコによる福音書」は661節から成っているが、その内の600節以上が「マタイによる福音書」の中に見出され、300節以上が「ルカによる福音書」の中に見出される。

レンブラント作「福音書記者マタイ」

8

「Q資料」



マタイとルカの両者は、既に存在していた「マルコによる福音書」と共に、「Q資料」と呼ばれるイエスの語録を用いたと考えられている。この「Q資料」とは、ドイツ語のQuelleの頭文字であり、源泉ないしは起源という意味である。この資料は現存せず、あくまでも推測の域を出ないが、イエスの語録や説教から成る「言葉福音書」とも呼べる文書であったと考えられる。

9

「マタイによる福音書」と「ルカによる福音書」との相違

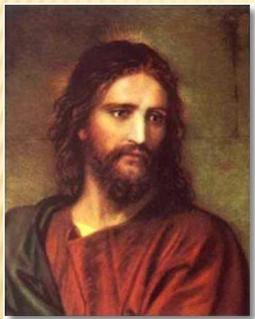


エル・グレコ作「聖ルカ」

- それでは何故、「マタイによる福音書」と「ルカによる福音書」には違いがあるのか。それはマタイとルカがそれぞれ独自に持っていた特殊資料によると考えられる。
- 「共観福音書」の冒頭を比較してみると、それぞれ異なる書き方で始めていることに気づく。

10

「イエス・キリストの系図」で始まる 「マタイによる福音書」



● 「マタイによる福音書」は、「イエス・キリストの系図」から始まっている。

● 1章1節の言葉が明確に述べているように、イエスはイスラエル民族の長であるアブラハムおよびダビデ王の子孫であり、旧約聖書が預言した救い主である。

● この系図は3組に分けられており、①アブラハムからダビデまで（1:2～6a）、②ダビデからバビロン捕囚まで（1:6b～11）、③バビロン捕囚からキリストまで（1:12～16）と、それぞれ14代ずつくなっている。

11

イエス・キリストの系図

1:1アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図。



1:2アブラハムはイサクの父であり、イサクはヤコブの父、ヤコブはユダとその兄弟たちとの父、1:3ユダはタマリによるパレスとザラとの父、パレスはエスロンの父、エスロンはアラムの父、1:4アラムはアミナダブの父、アミナダブはナアソンの父、ナアソンはサルモンの父、1:5サルモンはラハブによるボアズの父、ボアズはルツによるオベデの父、オベデはエッサイの父、1:6エッサイはダビデ王の父であった。

12

イエス・キリストの系図



ダビデはウリヤの妻によるソロモンの父であり、1:7 ソロモンはレハベアムの父、レハベアムはアビヤの父、アビヤはアサの父、1:8 アサはヨサパテの父、ヨサパテはヨラムの父、ヨラムはウジヤの父、1:9 ウジヤはヨタムの父、ヨタムはアハズの父、アハズはヒゼキヤの父、1:10 ヒゼキヤはマナセの父、マナセはアモンの父、アモンはヨシヤの父、1:11 ヨシヤはバビロンへ移されたころ、エコニヤとその兄弟たちとの父となった。

13

イエス・キリストの系図

1:12 バビロンへ移されたのち、エコニヤはサラテルの父となった。サラテルはゾロバベルの父、1:13 ゾロバベルはアビウデの父、アビウデはエリヤキムの父、エリヤキムはアゾルの父、1:14 アゾルはサドクの父、サドクはアキムの父、アキムはエリウデの父、1:15 エリウデはエレアザルの父、エレアザルはマタンの父、マタンはヤコブの父、1:16 ヤコブはマリヤの夫ヨセフの父であった。このマリヤからキリストといわれるイエスがお生れになった。1:17 だから、アブラハムからダビデまでの代は合わせて十四代、ダビデからバビロンへ移されるまでは十四代、そして、バビロンへ移されてからキリストまでは十四代である。



14

イエス・キリストの系図



ジャン=フランソワ・ミレー作
「落穂拾い」

● この系図には、ダビデ王やソロモン王を始め、ユダヤの王たちといった錚々たる人物たちの名前が連なっている。

● しかし注意して読むと、タマル、ラハブ、ルツ、ウリヤの妻、そしてマリアといった、5人の女性の名が出てくることに気づく。

● ユダヤ人の系図には、女性の名は記録されないのが普通であった。

● しかもルツは異邦人であり、他の女性たちも曰くつきである。

15

イエス・キリストの系図



● 古代イスラエルでは結婚した女性が夫との間に子が生まれないまま寡婦となった場合、レビラート婚の規定（申命記 25：5～10）により、亡くなった夫の兄弟と結婚し、家名を存続させる義務がある。しかしタマルの義父であるユダはそれを拒んだため、タマルは娼婦を装い、ユダと関係して子どもを産む（創世記38章）。

● ラハブはヨシュアのカナン侵入に協力した女性であるが、遊女であった（ヨシュア記2:1～21）。

● 「ウリヤの妻」とはバト・シェバのことである。彼女は将軍ウリヤの妻であったが、ダビデ王によって強引に妻として迎えられた（サムエル記下11:1～12:25）。

16

イエス・キリストの系図



- 系図というのは自身の存在起源やアイデンティティを確立するのに重要な要素である。
- 系図には恥となることは載せないのが普通である。
- しかしイエスの系図には、**神が人間の不信仰や不純を越えて、救いの御計画を遂行される**という強い確信が、表されているのである。
- マタイは系図の中に4人の異邦人の女性の名を記すことにより、イエスが異邦人の血を受けて生まれたこと。イエスの福音はイスラエルの枠を超えた全世界に広められるべきものであることを予示している？ cf. 「だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。」（マタイ 28：19）
- ちなみに、「ルカによる福音書」の系図では順序が逆であり、イエスから遡ってアダムまで行き、そして神に至るという記述になっている（ルカ3:23～38）。

17

キリスト降誕物語 マタイ版

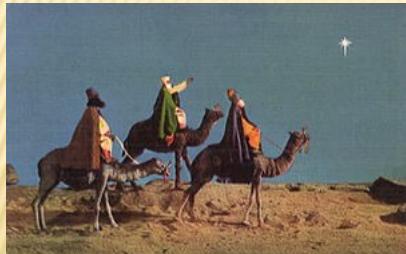


- 「マタイによる福音書」は、イエス・キリストの系図に続いてその誕生の様子が記される（1:18～25）。
- ヨセフへのお告げ
- マリアは聖霊によって身ごもる
- イエス＝神（ヤハウェ）は救い
- インマヌエル＝神は我々と共におられる

18

占星術の学者たち（マタイ2：1～12）

- 東方からの博士たち=占星術の学者たち



- メシアが生まれる場所
⇒ ユダヤのベツレヘム（ダビデ王の出生地）

- 旧約聖書のミカ書5章1節に記された預言の成就

19

占星術の学者たち（マタイ2：1～12）



- 黄金・乳香・没薑
- 特に黄金と乳香は、王に獻げる贈り物（イザヤ書 60：6）
- イエスを訪ねて来た学者たちの数は、聖書テキストそれ自体には記されていない。しかし、3種の贈り物から3人と見なされるようになった。
- 学者たちは、別の道を通つて帰還

デューラー作「東方三博士の礼拝」

20

占星術の学者たち（マタイ2：1～12）

● 古代世界にある類似物語



紀元後66年、アルメニアの王であったティリダテス1世はペルシアの占星術師たちと共にナポリにいる皇帝ネロを訪問した。それはネロ皇帝から王位の承認を得るためにあった。ティリダテス王と占星術師たちはネロを世界の王として礼拝し、往路とは別の道を通って帰国したという記録がある。

● マタイは上記の史実や伝承を改変し、福音書に取り入れた？

21

幼児虐殺

● 学者たちが別の道を通って故郷へ帰還したことを知ると、ヘロデ王は激怒。



ブーサン作「幼児虐殺」

● イエス誕生によって引き起こされる陰謀と血生臭い事件が、2章には報じられている。

● ウィリアム・ブーサンが誕生する数か月前、将来ローマ皇帝になる偉大な人物が生まれるという神託が下された。それを恐れた元老院は、誕生した子どもたちを殺害する決議を行った。しかし、一部の元老議員たちの中に、妻が妊娠している者たちがいたため、決議の施行を妨げたという出来事があり、この出来事とマタイ福音書との類似をマルティン・ヘンゲルは指摘している。

22

幼児虐殺



フラ・アンジェリコ作「幼児虐殺」

- Typological interpretation
(予型論的解釈)

- (旧約) モーセ VS フアラオ (エジプトの王)

- (新約) イエス VS ヘロデ (ユダヤの王)

23

キリスト降誕物語 ルカ版



- 「ルカによる福音書」の冒頭には「献呈の言葉」が記されている(1:1～4)。ここには神の救いの業が、イエス・キリストを通して歴史の中に実現したことを、正確に伝えようとする真摯な姿勢が伺える。
- 「マタイによる福音書」では、イエス誕生の予告は夫ヨセフに夢の中で告げられる。それに対し、「ルカによる福音書」では、天使がマリアに直接告げている(1:26～38)。若干の相違はあるが、ここで大切なのは、「処女降誕」という神の力によって、イエスが誕生したことである。

24

キリスト降誕物語 ルカ版



ジオット作「キリスト降誕」

ルカはまた、歴史的関心を前面に出している。2章はローマの皇帝アウグストゥスの名によって始まり、続く2節では、シリア州の総督であるキリニウスの名も出てくる。これはルカが、イエスの誕生を世界史と結びつけて考えている、ということである。そしてイエス・キリストは、全世界の救い主であるという、彼の信仰が表れ出ているとも言えよう。

25

キリスト降誕物語 ルカ版

● ルカはイエス誕生の物語を、賛歌を用いることによって格調高く描いている。



● 「マリアの賛歌（1:46～55）」
「ザカリアの賛歌（1:68～79）」
「天使の賛歌（2:14）」
「シメオンの賛歌（2:29～32）」
といったように、イエス誕生の前に2つ、誕生後に2つ、合計4つの賛歌を記している。

26

羊飼いたちへのお告げ



● ルカによる福音書では、救い主イエス・キリスト誕生の知らせは、虐げられていた羊飼いたちに真っ先に告げられる。

● 高い者は低くされ、低い者は福音を聞かせられて高くされる。

cf. ルカ1：52～53参照。

27

マルコによる福音書



「マルコによる福音書」には、イエスの降誕物語が記されていない。マルコは福音書の冒頭を「神の子イエス・キリストの福音の初め」という言葉で飾っている（1:1）。これは明確な信仰の告白である。ナザレのイエスこそ、神の子キリストであるという信仰に基づいて、その生涯を語るという宣言でもある。

28

マルコによる福音書



ジオット作「磔刑」

この「神の子」という称号は、後にイエスが十字架の上で息を引き取った時、ローマの百人隊長によっても告白される（15:39）。

そのように、マルコによる福音書の全編に「イエスこそ神の子」というキリスト論が貫かれているのである。そして洗礼者ヨハネが先駆者として、神の子イエス・キリストのために道備えをする者として描かれている（1:2～8）。

ヨハネによる福音書



● ヨハネ福音書は共観福音書と異なる独特的の視点に立ち、イエスの生涯を物語っている。

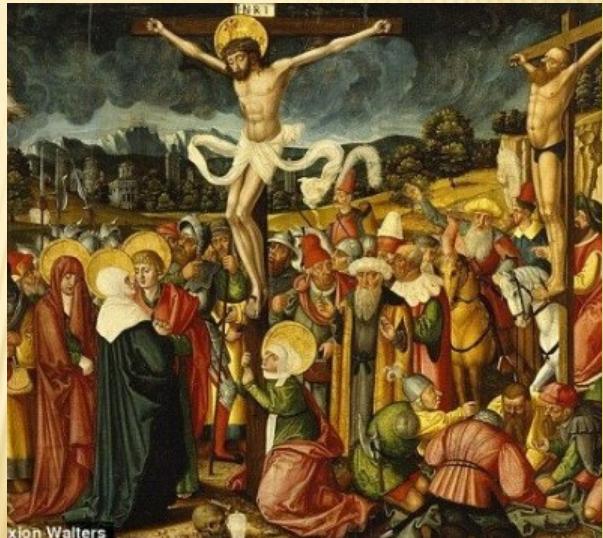
● その書き出しが創世記1:1（「初めに神は天地を創造された。」）を反映していると共に、イエスを受肉した神の言葉として描いている。この書き出しが、読者を万物の創造に先立つ神の無限の高みへと誘う。

● 1章1～5節 言は神であった。ロゴス・キリスト論

● 1章6～8節 洗礼者ヨハネとイエスとの関係。洗礼者ヨハネは、イエスの理想的な証言者。

1章9～13節

最も短く簡潔 なイエス伝



31

ヨハネによる福音書 1章14～18節

●「わたしたち」・・・このプロローグ（序文）は、福音書記者ヨハネが属する教会全体の告白であり賛歌である。

● 1章14節 「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」。キリストの降誕をたった一言で簡潔に言い表している。そこにはマタイ福音書やルカ福音書とは異なり、博士も羊飼いも登場しない。しかしイエス・キリストの降誕を、実際に雄弁に物語っている。神の言であるイエス・キリストが、私たち人間と同じ肉体をまとって、この地上にお生まれくださいったのだ、と。



32

神の子の受肉

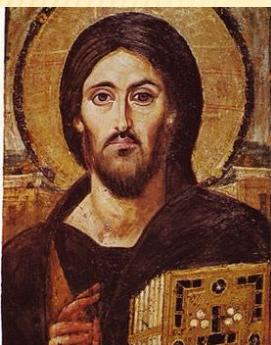
●「肉（サルクス）」という言葉の中には、人間に対する軽蔑的なニュアンスがある。脆く、弱く、罪深い。そしてやがては死ぬ、はかない存在である人間。こうした人間を指す言葉が、肉（サルクス）である。

●神の子イエス・キリストは、そのような肉を身にまとうほど、ご自身を低めてくださった。つまり、神が身を捨てたということである。しかも、私たちと同じ「肉」をまとったイエス・キリストは、十字架の死に至るまで、父なる神に従順であられた。このため、神はキリストに栄光をお与えになった、とフィリピの信徒への手紙2:6～11（「キリスト讃歌」と呼ばれる）も告げている。



33

ヨハネによる福音書



●結語である20:30-31には、この書の目的が明白に記されている（これに続く21章は後代の付加であると考えられている）。それはイエスを神の子メシアと信じる信仰へと導くためであり、信じて命を得るためにある。

●このように、ヨハネ福音書は最初から最後まで、「イエスとは何者か」というキリスト論を問題としている。例えば「光」という象徴をイエスに当てはめ、「光は暗闇の中で輝いている」(1:5)、「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」(8:12)等、象徴的な言い回しによって、イエスがどのような存在であるかを表している。

34

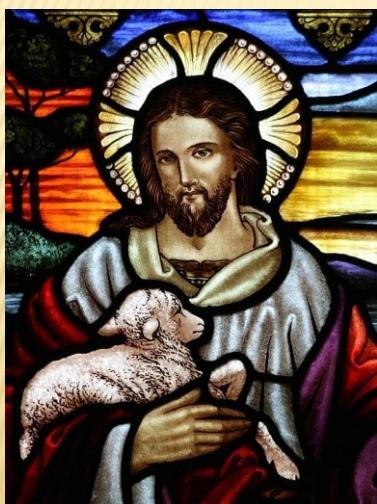
ヨハネによる福音書



共観福音書には「神の国」という語が頻繁に登場するが、ヨハネ福音書には僅か3回しか登場しない。その代わり、「永遠の命」という語が繰り返し出て来る。これは終末論の現在化という問題である。ヨハネ福音書では、遠い将来が問題とされるのではなく、「今、この時」が重要なのである。そしてイエス・キリストを信じる者には、永遠の命が今、既に与えられていることが約束されているのである。

35

結びに代えて



これまで概観したように、福音書はイエス・キリストの生涯を記した単なる伝記ではなく、イエスこそ全人類にとっての救いであることを世に知らしめる信仰の書である。また、4つの福音書間には微妙なニュアンスの違いがあるが、そうした若干の相違こそが、聖書の奥行きの深さを表しているのである。

36